

《史料紹介》

中国の出世双六「陞官図」について

高田 幸男

はじめに

今年度、「陞官図」というものを古書店から入手した。「陞官図」は後述するように出世の階段を登り頂点を目指すゲーム、いわば“出世双六”である。古書店の目録には、詳細な説明はなかったが、筆者は教育史や地域エリート（いわゆる郷紳）研究を主たる研究分野としているので、何らかの役に立つであろうと、古書店で現物を確認し、研究費で購入することにした。

すると、研究費担当部署から「陞官図」をどのように利用するのか問い合わせて来た。「陞官図」という名前だけでは、これがゲームだとは分からないので、ゲームであること確認した上で、その使用目的を確認してきたのである。そこで、原所蔵者が不明なため詳細はわからないが、1つは清代の文官の官職と等級が、もう1つは中華民国前期の武官の官職と等級が印刷されていて、当時の文武両官の出世観を示す貴重な史料だが、考証をする必要があるので、その上で研究に使用したいと回答した¹⁾。

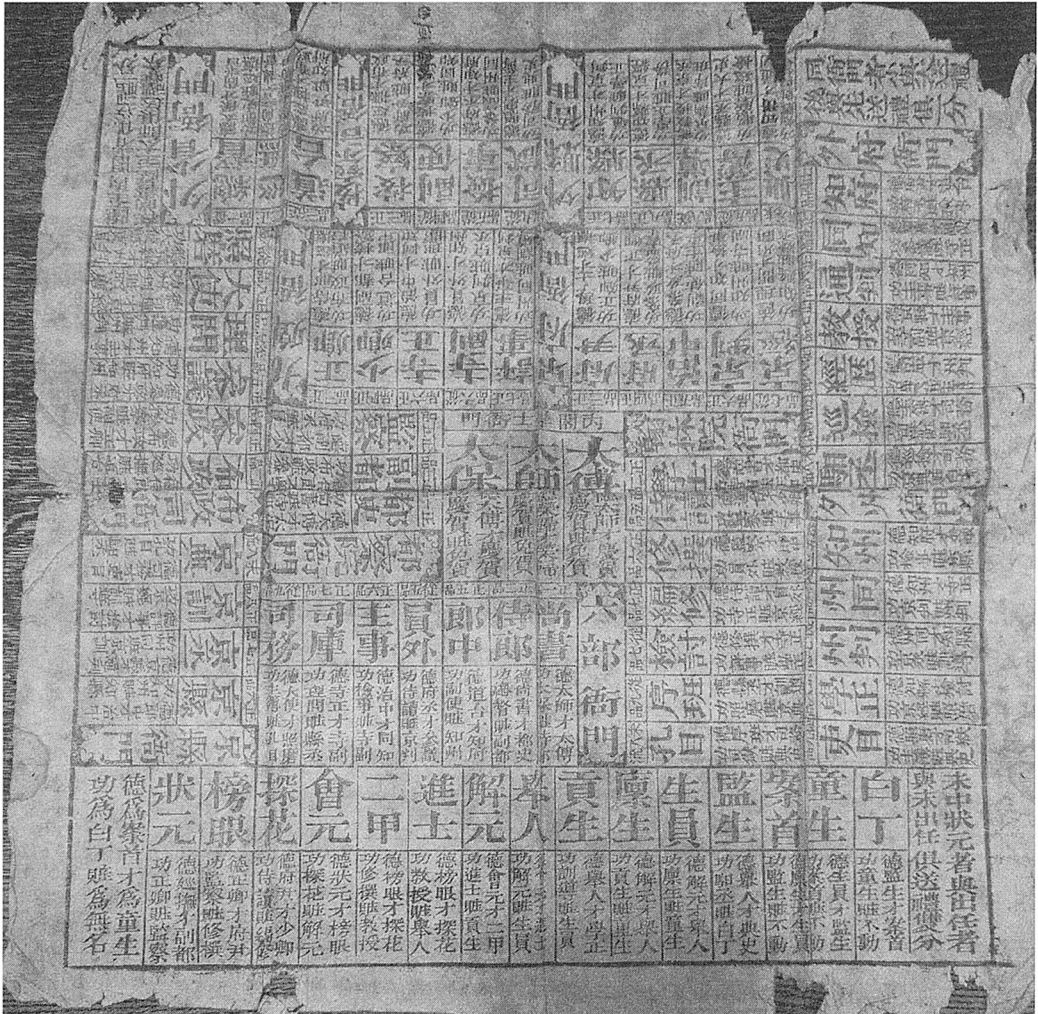
本稿は、回答を実行すべく2種の「陞官図」について考証をおこなうものである。

1. 2種の「陞官図」

まず今回入手した2種類の「陞官図」について簡単に紹介しよう。

1つ目の「陞官図」はタテ約55cm、ヨコ約54cm、ほぼ正方形である。紙は伝統的な画仙紙のような紙で、木版印刷である。四隅はほつれ、ところどころシミがあり折り目が幾重にも付いて、あまり保存状態がよくない。また2か所に書き込みがあり、1つは「外省衙門」の「副使」に「才は道台〔下線部が書き込み〕」と、もう1つは「外県衙門」の「典史」に「徳は知州」と書き加えられていて、元の字は読めない。のちに詳述するように、この「陞官図」は中央に「内閣学士衙門」を配した文官の「陞官図」で、以後、本「文陞官図」とよぶことにする（図1）。

図1. 本「文陞官図」

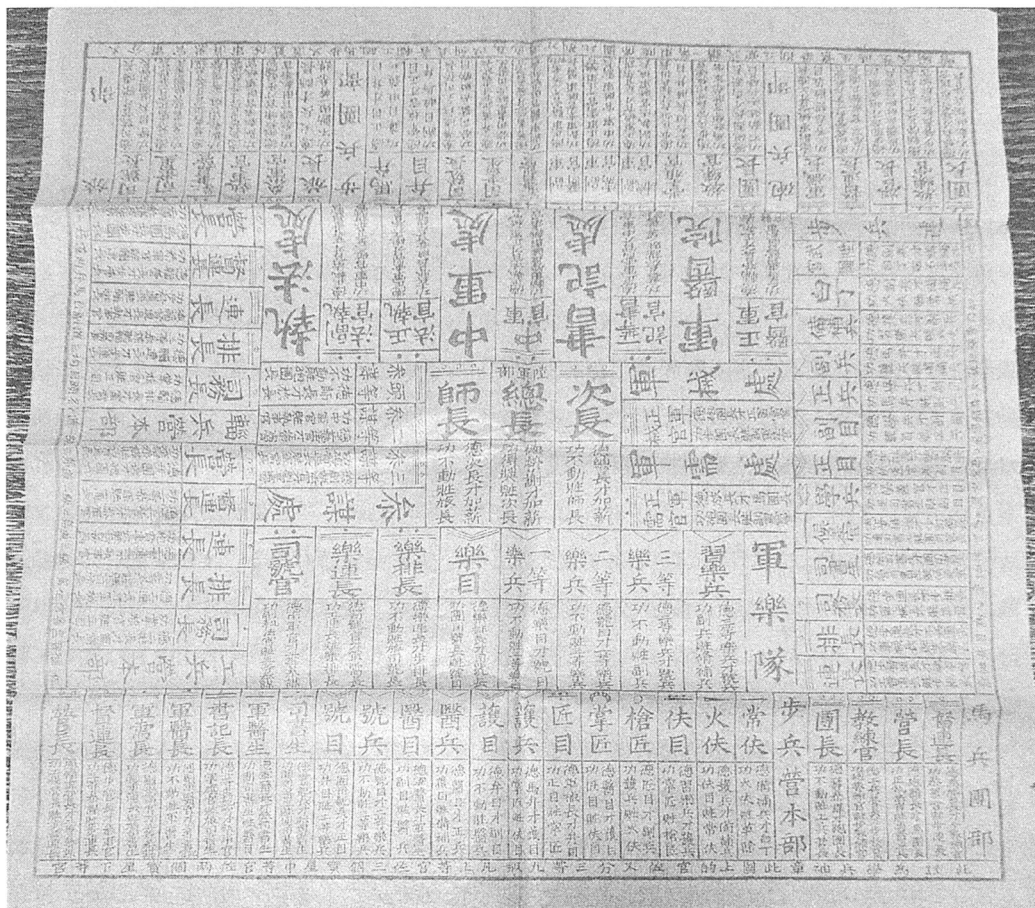


2つ目は、これとは対照的に保存状態が極めてよい。大きさはタテ約44cm、ヨコ約46.5cmと「文陞官図」と比べて一回り小さく、紙は機械製紙に石版印刷で、近代の印刷物であることは一目瞭然である。縁は多少傷んでいるものの折り目も一通りしかなく、ほとんど使われていないと思われる。こちらの図柄は中華民国初期の武官なので、後述する東洋文庫所蔵品に倣い本「武陞官図」とよぶことにする(図2)。

すなわち、この2種の「陞官図」は目録に並べて売り出されていたが、紙や印刷方法が全く異なり、元々一対だったとは思えない。古書店が個別に入手して並べたものか、それとも旧蔵者が文武両官の「陞官図」としてまとめて所有していたものを古書店が入手し、そのまま売り出した

のか。目録に同時に登場したところをみると後者であろうか。

図2. 本「武陞官図」



2. 「陞官図」とは

前述のように「陞官図」は“出世双六”である。盤上の各マスには官職名が書かれており、その下に4つの賞罰「徳」、「才」、「功」、「脏[贓の俗字。収賄の意味]」⁽²⁾による駒の行き先が書かれている。

中尾徳仁『天理参考館の漢族資料』は、「陞官図」の「遊び方には諸説ある」としつつ、4面の独楽(図3)を使う方法を紹介している⁽³⁾。

図3. 「陞官図」に使う独楽

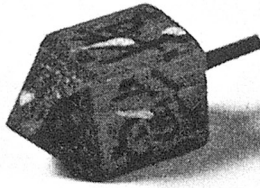


図4. 本「文陞官図」のスタート位置



出典) 中尾徳仁『天理参考館の漢族資料』

天理大学おやさと研究所、2017年、37頁。

独楽には各面に上記賞罰が1つずつ記されており、プレイヤーは独楽を回して出る賞罰に従って駒を進める。参加人数は2人以上で上限はないという。各プレイヤーのスタート位置も独楽の出た目に従って決められる。天理参考館所蔵品(以下、「天理蔵文陞官図」)では「徳」が出れば「案首」から、「才」は「童生」、「功」は「白丁」からスタートし、「脏」が出たら1回休みとなる。「天理蔵文陞官図」では印刷がかすれて読めないが、筆者が入手した本「文陞官図」の盘面左下隅には「徳は案首と為し、才は童生と為し、功は白丁と為し、脏は無名と為す」とあり(図4)、「脏」は駒を置く場所がないので、1回休みということになる。以後も独楽の出た目に従って駒を進めるが、

通常は「徳」に対する指示が最も良く、飛び級で昇進することができる。「才」も昇進でき、「功」はほとんど動かず、「脏」ならば降格となる。⁽⁴⁾

こうして駒を進め、中央に配置された「太師」に到達し、そこで「榮帰(退職)」が出ると「上がり」となるのである⁽⁵⁾。このほか、昇進の際などに「礼(チップ)」を送る⁽⁶⁾。

「功」があってもほとんど昇進できず、「徳」があると早く昇進できるというのは、徳治を重んじる中国の統治理念を示している(現実はともかく)。そのため、「陞官図」から中国の政治文化、官僚文化を論じることができそうであり、実際、香港ではト永堅『遊戯官場：陞官図与中国官制文化』という書籍も出ている(筆者未見)⁽⁷⁾。

ちなみに、天理参考館所蔵の独楽では「才」は「財」となっている(図4)。才と財は漢語普通話(標準語)で同じ発音だが、才力による出世と財力による出世では意味が全く異なってしまう。後述する「擲陞官図譜」など、管見の限りどの文献をみても「才」を「財」とするものはなく、なぜこの独楽だけが「財」となっているのか不明である。タテマエの「才」より「財」というホンネの表れなのだろうか⁽⁸⁾。

なお「陞官図」の基本は官職が記されているだけで、日本の双六のような絵がないので、一見、これがゲーム盤だとはわからない。つまり、これを楽しめるのは官位昇進のプロセスが頭に入っている官僚やその予備軍たる読書人なのである。

実際、清代の特に州や県の衙門（役所）に勤務する官僚や胥吏の間で「陞官図」が流行したという⁹⁾。現実には思うに任せぬ出世をゲームで楽しみ、憂さを晴らしたのだろうか。

3. 「陞官図」の所蔵状況

それでは、日本国内における「陞官図」の所蔵状況はどうであろうか。

たとえば「全国漢籍データベース」で「陞官図」を検索すると、5件ヒットするが、このうち九州大学所蔵「陞官図登殿」は「中国古典戯劇脚本小冊子第十二帙」に収められている戯劇（芝居）の台本であり、同じく愛知学院大学所蔵の「陞官図」も北京首都図書館所蔵「清蒙古車王府蔵曲本」所収の「景印」（写真印刷した複製本）で、戯曲の類と思われる。他の3件は、国立公文書館と東京大学総合図書館が所蔵する康熙刊本（木版印刷）の清沈賦撰『居易堂清課七種』、および京都大学人文科学研究所東アジア人文情報学研究センターが所蔵するその景印本で、いずれも「西湖居易堂主人論定」なる「擲陞官圖譜」一卷を含む¹⁰⁾。このうち国立公文書館蔵書は林大学頭旧蔵書で、同館の「デジタルアーカイブ」で閲覧が可能であるが、これは「陞官図」のルールブックでわずか4葉しかなく、「陞官図」そのものは掲載されていない¹¹⁾。

次にCiNiiで「陞官図」を検索すると、上記、戯曲本、居易堂「擲陞官図」のほか、陳白塵作の戯曲「陞官図」とともに、「武陞官図」、「大総統陞官図」、「陞官図」、『支那歴史風俗資料頒布会』がヒットする。このうち「武陞官図」から「陞官図」までは東洋文庫が所蔵している。残る『支那歴史風俗資料頒布会』は東京大学東洋文化研究所（東文研）と東京外国語大学付属図書館が所蔵となっていた。

東文研で実際に閲覧してみると、『支那歴史風俗資料頒布会』は雑誌のような冊子状の物ではなく、対聯や年画などとその説明を台紙に貼り付けたものが何枚も封筒に入っているというものだった。そしてその第7期に「陞官図」も貼り付けられていた。台紙を入れた封筒のおもて面の上部には中華民国の地図が描かれ（ただし台湾は描かれていない）、地図の上に白抜きで「4626」の数字が印刷されている。その下部には

〔縦書きで〕 毎月一期／会費金壹圓

〔横書きで右より〕 支那歴史風俗資料頒布会／第七期

〔縦書きで〕 総通信処／大連沙河口元町一二二／廣文化社／電話九六九二／大連代理処

日本全国総代理処／東京本郷区／東片町六九／一真社¹²⁾

と印刷されている。『支那歴史風俗資料頒布会』に関する論考は、現時点で見当たらないが、東京大学 OPAC の『支那歴史風俗資料頒布会』に対する「一般注記」には

月刊、毎回、中国の民族資料の実物を一袋にまとめて刊行

書誌事項は封筒表面による

封筒表面に"4626"(第1期-第7期), "4627"(第8期-第12期), "年"(第13期)との、黄帝紀元と思われる記載あり

第13期の出版者: 東京、日華學會ほかに変更⁽¹³⁾

とある。推測するに、中国民俗資料の実物に簡単な説明を添えて、会費制で研究者や愛好者向けに通信販売していたものであろう。それならば、発行部数がどのくらいあったのか不明だが、すべて年画や陞官図を添付していたのであろうかという疑問が残る。実際、東京外国語大学 OPAC でも「陞官図」を検索すると『支那歴史風俗資料頒布会』がヒットする。だが、同大付属図書館が所蔵するのは第1期から第5期までであり、OPAC には各期の内容が記載されておらず、「陞官図」がどこに収録されているのか確認する必要がある⁽¹⁴⁾。

このほかネット上で探すと、学習院大学東洋文化研究所の「東アジアバーチャルミュージアム」に「三侠剣陞官図」が、早稲田大学図書館の「古典籍総合データベース」にも「陞官図」が掲載されており、前者には遊び方の説明も付いている⁽¹⁵⁾。いずれも CiNii ではヒットしないが、「陞官図」が冊子ではなく遊戯盤なので、書籍として扱われないためなのかもしれない。

このように、「陞官図」は日本国内で少なくとも天理参考館、東洋文庫(3種)、東京大学東洋文化研究所、学習院大学東洋文化研究所、早稲田大学にあることが確認できた。以下、これらと今回入手した「文陞官図」、「武陞官図」を比較してみよう。

4. 「文陞官図」、「武陞官図」の比較検討

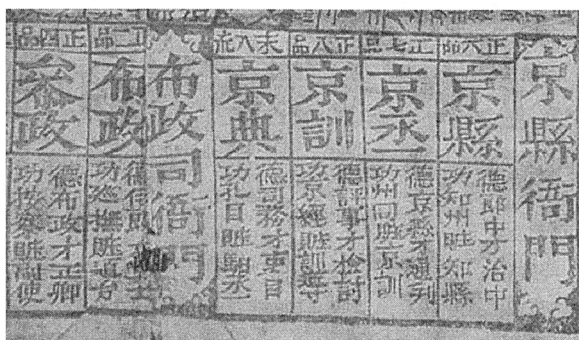
(1) 本「文陞官図」

まず本「文陞官図」からみていこう。この図は中央に「内閣学士衙門」と「太傅」、「太師」、「太保」(以上をまとめて「三公」とよぶ)を配していて、その周囲を官職・身分の列が二重に取り囲んで配置されており(便宜上、外側を外郭、内側を内郭とよぶ)、中央の「太師」を目指して昇進していく(図1、5)。

図5. 本「文陞官図」の「三公」



図6. 本「文陞官図」の「京県衙門」



外郭の底側は科挙の階梯を示し、「白丁〔未受験の庶民〕」から左に殿試首席合格の「状元」まで並んでいる。以下、外郭を時計回りにみていくと、左下側は「京県衙門〔首都周辺県の役所〕」でその筆頭は「京県〔この場合は京県の知事〕」で上部に官の品級（等級）である「正六品」が付記される（図6）。続く左上側は「布政司衙門」で、上側へ回ると「外省衙門」、「按察司衙門」、「外県衙門」、右側には「外府衙門」、「外州衙門」が並ぶ。これらはすべて地方官（外官）で、その頂点が総督である。内郭は、下に「六部衙門」、左に「都察院衙門」、上に「九卿衙門」と「京府衙門」、右に「翰林院衙門」が配置されている。六部、都察院、九卿、翰林院は中央官庁で、京府（京兆府）は首都北京の地方政府（日本の東京都庁に相当）である。

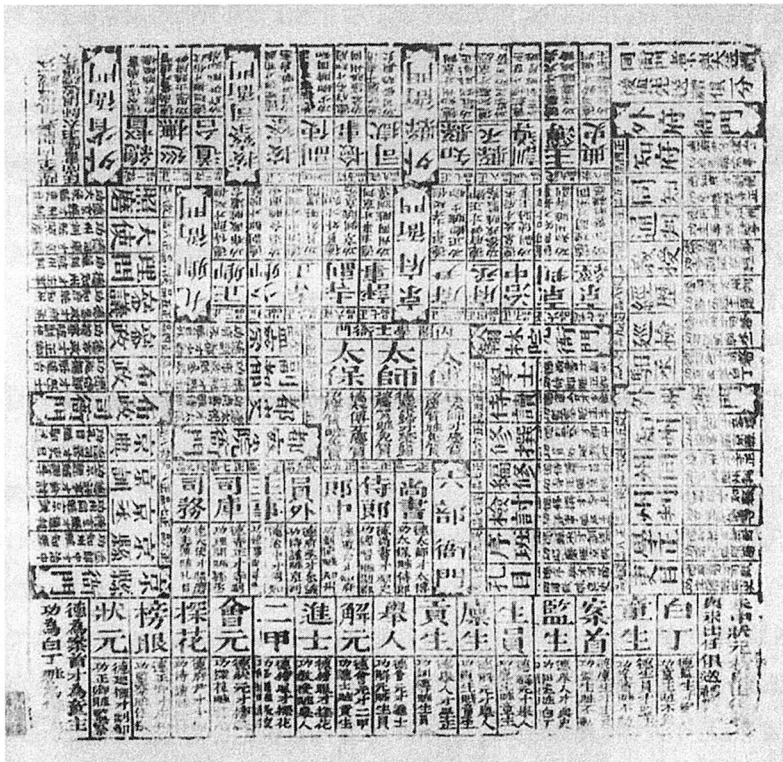
駒は普通の双六のように単線的に外郭から内郭へ進むのではなく、独楽の目の指示に従い、実際の昇進のように地方官と中央官僚（京官）の間を複雑に往来しつつ品級を上げていくことになる。そして中心部では「太保」、「太傅」、「太師」の順で昇進し、前述のように「太師」で「徳」が出ると「榮帰」で上がりとなる。

「内閣」は明代初期に設置された皇帝を補佐する機関で、「三公」は明清には勲功著しい官僚に与えられる称号的な名誉職（兼職）となっている。内閣大学士は明の永楽帝によって設けられた官職だが、明代には臨時職だった「総督」が「外省衙門」の筆頭に配置されているので、盤面の配列は清代の官制にもとづくものであることがわかる。ただ、ここには理藩院のような諸民族を管轄する機関はなく、あくまで清朝が明から受け継いだ中国王朝としての官制が図示されている。これが官吏を目指す者が一般的にイメージする官制像、出世の階梯だったのであろう。

(2) 天理参考館蔵「文陞官図」

「天理蔵文陞官図」(図7)は「20世紀末期、河北省武強市 版の天地50.1cm 版の左右50.8cm」⁽¹⁶⁾とあり、本「文陞官図」よりやや小さいが、構図は全く同じで、官職の配置のみならず、「衙門〔役所〕」の枠の装飾も同じである。ただ、字体は明らかに異なる。おそらく同一の版木にもとづいて別個に模刻されたか、一方がもう一方の版木を模刻したのではないだろうか。前者は四隅がかすれていたり、ところどころ刷りのムラがあったりするのに対し、本「文陞官図」の方が刷りが鮮明である。本「文陞官図」の方が紙の傷みは激しいのに印刷が鮮明に見えるのは、民国期かそれ以前に刷られて紙が経年劣化しているからで、一方「天理蔵文陞官図」は刷られたのは比較的最近だが、版木が古く摩耗しているということだろうか⁽¹⁷⁾。

図7. 天理蔵「文陞官図」



出典) 中尾、前掲書、37頁。

(3) 東洋文庫蔵「文陞官図」

本「文陞官図」は「天理蔵文陞官図」と構図が同じであるが、文官の陞官図がすべて同じ構図というわけではない。東洋文庫所蔵の「陞官図」(以下、「文庫蔵文陞官図」)は、「三公」を「内

閣学士衙門」で括らず、中央に配置しているものの他のマスと大きさがさほど変わらず、目立ちにくい。また官職はおおむね同じように配列されているが、それを括る名称が、本「文陞官図」では「六部衙門」となっているのに対し、「文庫蔵文陞官図」は「天官六部」となっているなど、かなり違っている。

「文庫蔵文陞官図」は縦・横とも49cmで、裏に「昭和八年六月二十日 瀧川政次郎殿寄贈」という寄贈票が貼られてあるのみで、20世紀のものと推測される以外、出版者等一切不明である⁽¹⁸⁾。

(4) 東京大学東洋文化研究所蔵「文陞官図」

前述のように『支那歴史風俗資料頒布会』第7期に収録されていたもので、添付された説明には、

陞官図は遊戯の一である、唐の李郢初〔ママ〕がこの図を創製した、大小の官名を図上に列べ或は升級或は降級するのである、宋の劉敞が選官図をつくつたとあるのは此物である、日本の双六に類似してをる、日本の双六も支那の古い遊戯具である、陞官図の種類はいいろ〔ママ〕ある、

とあるが、本品に関する情報は記されていない⁽¹⁹⁾。『支那歴史風俗資料頒布会』の出版者が大連の広文化社なので、大連ないし中国東北部で収集されたか、注文に応じて印刷された物であろうか。機械製紙に石版で印刷されている。同図の特徴は、官職自体は本「文陞官図」と同様、清代の官職であるが、中華民国初期の国旗「五色旗」とおぼしき旗が2本交差する図が衙門名の上に配置されており、民国初期（1912年～28年）に印刷されたものと思われる。

(5) 早稲田大学蔵「文陞官図」

前述のとおり早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」に「陞官図」として収録され、ネット上で画像が閲覧できる。同図は「浅井暹旧蔵」で「台湾・満州民俗版画 1934年頃於大連市小崗子街採集 欄外に「住怡和斗店西劉記」とあり」、出版地・出版者・出版とも不明である。大きさはタテ46cm、ヨコ43cmで、本「文陞官図」より一回り小さい⁽²⁰⁾。本「文陞官図」と同様、官職を衙門ごとにまとめて、ほぼ同じ配置になっているが、中心部が「内閣衙門」となっていて「三公」に「少保」が加えられている。

そして、同図の大きな特徴は、朱と藍の二色刷の石版印刷（官職・衙門名が朱刷り）であること、官職の上に品級ではなく、梅蘭芳などの役者の名が記されていることである。すなわち、これは単なる陞官図ではなく、役者の番付表を兼ねているようなのである。官界の昇進に詳しくないものでも芝居好きなら楽しめるということであろうか。

(6) 学習院大学東洋文化研究所蔵「三俠劍陸官図」

さらに前述の学習院大学東洋文化研究所蔵の「三俠劍陸官図」もネットで公開されている。「張杰鑫〔ちょうけつきん〕(1862~1927)が『明清八義三俠劍』という題で上演したもの。後に『新天津報』に連載され、1930年代に出版された」という武俠ものの芝居・小説を陸官図にしたもので、紙質からも20世紀半ばのものだと推定される」とのことである。タテ43.8cm、ヨコ46.2cmと、みたところ本「武陸官図」と、紙質や印刷が似ている。陸官図には『三国志』や『水滸伝』などを題材としたものが多いが、『三俠劍』を題材としたものは珍しいという⁽²¹⁾。

(7) 本「武陸官図」

今までみてきたように

図8. 本「武陸官図」の中心とスタート位置

陸官図の基本は文官のようであるが、武官の陸官図がなかったわけではない⁽²²⁾。ただ今回入手した「武陸官図」は中華民国初期の軍制によるもので、機械製紙に青インクの石版印刷で1912年の中華民国成立以降のものであることは明



白である。上側の縁に「この図は陸軍第一講武堂五期畢業生延芝氏編繪〔作図〕」とある。

中央には「陸軍部 総長」が配され、その右に「次長」、左は「師長」が配され、官名の上には品級ではなく、軍隊内の階級を示す肩章の模様が描かれている(図8)。

「武陸官図」の題字は、なぜか外郭右側の「歩兵連〔「連」は中隊〕」にあり、その左に階級章のない「白丁」、「備補兵〔補充兵〕」から「連長〔中隊長〕」まで並んでいる(図8)。外郭はそこから時計回りに、底側に「馬兵団部〔騎兵連隊、「団」は連隊〕」、「歩兵營本部〔「營」は大隊〕」、左側に「工兵營本部」、「輜兵營本部〔輜兵は輜重兵〕」、上側に「旅部〔旅団〕」、「歩兵団部」、「砲兵団部」が並ぶ。内郭は、右側から「軍戒処」、「軍需処」、底側に「軍楽隊」、左側に「参謀処」、上側に「執法処」、「中軍処」、「書記処」、「軍医院」が並ぶ。

(8) 東洋文庫蔵「武陸官図」

東洋文庫蔵の「武陸官図」は出版地不明、出版者不明、出版年不明である。寸法は本「武陸

官図」より若干大きいタテ49cm、ヨコ49cmとなっているが、みたところ本「武陞官図」と全く同じ紙質と印刷であり、同一版であろう。なおこの文庫蔵文陞官図も(3)と同様、裏に「昭和八年六月二十日 瀧川政次郎殿寄贈」の寄贈票が貼られてある。

(9) 東洋文庫蔵「大総統陞官図」

東洋文庫が所蔵するもう一つの陞官図も、文庫所蔵の他の2点同様、裏に「昭和八年六月二十日 瀧川政次郎殿寄贈」の寄贈票が貼られてある。寸法はタテ49cm、ヨコ49cm、「武陞官図」とよく似た体裁で、紙質も石版印刷も共通するが、朱色のインクで印刷されている。やはり出版地、出版者、出版年とも不明であるが、中華民国初期の文官制度を反映する物として、「武陞官図」と対にして出版、販売された可能性がある⁽²³⁾。

中央には「大総統」が配され、その右に「副総統」、左に「國務總理」が配されている。

外郭の底側右側に遊び方の「説明」と「大総統陞官図」の題字があり、その左に「白丁」、「学生」、「班長〔級長〕」、「畢業〔卒業〕」、「出洋留学」、「教員」、「校長」と続く。「白丁」から「校長」までは「括り」がないが、おおむね学校関係者である。その左は「◎省議会」という「括り」で、「省会議長」、「省会副議長」、「省會議員」が並ぶ。その次は左側へ回り、「財政部」、「外交部」、「蒙蔵局」が続く。中華民国の支配がなかなか及ばないモンゴル・チベット方面を管轄する蒙蔵局がここに登場しているのが興味深い。上側へ回ると「審判庁〔裁判所〕」、「警察庁」、「府尹衙門」が続く。「府尹衙門」には京兆府長官である「府尹」や県の「知事」が含まれ、審判庁や警察庁と並んでいるのは、知事が裁判を代行している状況を反映しているのかもしれない。外郭の右側には省の行政機構の「行政公署」と「外省衙門」が並ぶ。

内郭は底側に「國務院〔日本の内閣に相当〕」が、左側に「司法衙門」が、上側に「總統府」が、右側に「〔衆参〕兩議院」が並ぶ。

おわりに

以上、今回入手した「陞官図」、「武陞官図」について、各機関所蔵の物と比較検討してみた。今回みたものは、いずれもさほど古いものではなく、20世紀初めか、せいぜい19世紀末以降のものであろう。複雑な「上がり」への階梯は、清代の官僚世界と気の遠くなるような出世の道を巧みに可視化したものであった。

文字ばかりの盤面は決して子どもや非識字層が遊べるものではない。出世に人生を賭け、高級官僚に憧れた読書人や官僚、胥吏ならばこそ、熱くのめり込むことができたゲームだといえよう。民国の時代になり官制が大きく変わると、旧官制の陞官図はリアリティを失っていったと思われるが、それでも旧官制の陞官図が広く遊ばれたのだとしたら、出世イメージの強固な残像による

のであろう。一方、旧官制に代わって中華民国の文武官制にもとづく陸官図が誕生するが、旧来のように官僚たちが熱中するようなことはあったのだろうか。一方、官界とは無縁の庶民の間では、官制から離れた役者や武俠物に題材を取った陸官図が流行したのであろうか。

今回は時間の問題もあり、図版を用いた詳細な比較検討ができなかった。今後の課題としたい。

註

- (1) 以前、20世紀初頭の中国で出版された教科書を購入しようとしたところ「研究費で教科書は購入できない」と言われたことがある。今回も、研究以外の目的による購入、ゲームをするための購入ではないか、確認を求められたのである。不正使用を防ぐため、こうした確認は必要なのであろう。だが、当然のことながら、ゲームであろうが、教科書であろうが、落書きの類でも歴史の痕跡を示すものは、すべて史料である。
- (2) 諸橋轍次『大漢和辞典デジタル版』大修館書店、2018年、763、800頁。
- (3) 以下の遊び方は、中尾徳仁『天理参考館の漢族資料』天理大学おやさと研究所、2017年、36～37頁による。
- (4) 同上。
- (5) 同上書、37頁。
- (6) 本「文陸官図」、および学習院大学東洋文化研究所東アジア学バーチャルミュージアム「三峽剣陸官図」の「解説」https://www.gakushuin.ac.jp/univ/rioc/vm/c04_kanseki/c0106_shozou/02.html (2022年2月12日最終閲覧)。
- (7) ト永堅『遊戯官場：陸官図与中国官制文化』香港：中華書局（香港）、2010年。なお、同書をCiNiiで検索したが、日本国内に同書を所蔵する図書館・研究機関はないようである（2022年2月12日最終閲覧）。
- (8) この独楽は「華北地方で制作されたもの」で、後述する同館所蔵「陸官図」と産地が異なる（中尾、前掲書、36頁）。
- (9) 趙超然「趣話清代盛行的升官図游戲，一時風靡社会，折射出衙門怎樣的生態」百度百科「陸官図」の解説 <https://baike.baidu.com/tashuo/browse/content?id=08398ec7a2a1ba53ec87bd38&lemmaId=16824012&fromLemmaModule=pcBottom&lemmaTitle=%E5%8D%87%E5%AE%98%E5%9B%BE> (2022年2月12日最終閲覧)。
- (10) 「全國漢籍データベース」<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki/> (2022年2月1日最終閲覧)。
- (11) 西湖居易堂主人論定「擲陸官圖譜」一卷、沈賦編『居移堂清課』清康熙31年序刊本（国立公文書館デジタルアーカイブ、<https://www.digital.archives.go.jp/file/1084416.html>。2022年2月1日最終閲覧）。

- (12) 『支那歴史風俗資料頒布会』第7期、東京：一真社、大連：広文化社、〔1928年〕封筒。
- (13) 「東京大学 OPAC」(https://opac.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/opac/opac_search/?lang=0) の『支那歴史風俗資料頒布会』(2022年2月12日最終閲覧)。
- (14) 「東京外国語大学 OPAC」(<https://www-lib.tufs.ac.jp/opac/>) の『支那歴史風俗資料頒布会』(2022年2月12日最終閲覧)。
- (15) 「三侠剣陞官図」(「東アジア学バーチャルミュージアム」、https://www.gakushuin.ac.jp/univ/rioc/vm/c04_kanseki/c0106_shozou/02.html。2022年2月12日最終閲覧)。「陞官図」(早稲田大学図書館「古典籍データベース」、https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ni16/ni16_02272_0132/index.htm。2022年2月12日最終閲覧)。
- (16) 中尾、前掲書、37頁。
- (17) 中尾徳仁氏に確認したところ、「天理蔵文陞官図」は旧蔵者が武強年画博物館で購入したもので、古くても1980年代に製造されたものとのことである。古いものではないとしたら、忠実な模刻品か、残っていた版本で新たに刷った後刷版ではないかと思われる。
- (18) 「陞官図」出版地不明、出版者不明、出版年不明。ちなみに東洋文庫「中国語図書検索」では簡体字で「升官図」と表示されるが、盤面には「陞官図」と印刷されている。
- (19) 前掲「東京大学 OPAC」『支那歴史風俗資料頒布会』の「書誌詳細」。ちなみに「陞官図」の原型とされる「骰子彩選格」を「発明」したのは唐代の官僚李邵といわれる(「百度百科」の「李邵」の項。<https://baike.baidu.com/item/%E6%9D%8E%E9%83%83/66809>。2022年2月12日最終閲覧)。したがってこの『頒布会』の説明は、「唐の李邵が初めてこの図を創製した」という中国語の記述の誤訳である可能性がある。
- (20) 前掲「陞官図」(早稲田大学図書館「古典籍データベース」)。
- (21) 前掲「三侠剣陞官図」(「東アジア学バーチャルミュージアム」)。
- (22) たとえば「瓶底児的博客」というブログに「清代武陞官図」が写真付で掲載されている(http://blog.sina.com.cn/s/blog_55c7a8d70102edqk.html。2022年2月17日最終閲覧)。だが、その「上がり」は、文尊武卑の価値観が反映して「三公」ではなく「公爵」、「侯爵」、「伯爵」どまりとなっている。
- (23) ただ細部をみると作図者の氏名が記載されていないなど「武陞官図」との相違もある。